

『日本キリスト教史における福音主義』

－戦前の日本プロテスタント・キリスト教史 における福音主義－

日本福音主義神学会東部部会・秋期講演会
2013年11月18日
発表者 新潟聖書学院院長 中村敏

はじめに

19世紀の半ば以降欧米の宣教師を通して日本に伝えられたプロテスタンティズムは、通常「福音主義（E v a n g e l i c a l i s m）」とされている。

佐藤敏夫（元東京神学大学学長、教授）

「もし日本初期プロテスタン神学の傾向を総括する概念があるとすれば、それは福音主義であるといわねばならない。」（『キリスト教神学概論』（新教出版社、1994年）309頁

「エヴァンジェリカリズム（福音主義）が日本のキリスト教に与えた歴史的体質：

- ① 日本のキリスト教が教義や信条をやかましくいうとか、礼拝儀式を重んじるというタイプではなく、生活や実践や体験を重んずるタイプのキリスト教。これは敬虔主義的キリスト教の一つの面。
- ② 倫理的清潔さ。これも敬虔主義の一般の特徴
- ③ 制度としてのキリスト教に対する運動としてのキリスト教という性格
- ④ 聖書主義。日本のプロテstanティズムの聖書主義は、宗教改革の聖書原理から直接由来しているのではなく、エヴァンジェリカリズムの聖書主義から由来しているとみるとべきである。」（『日本のキリスト教と神学』（日本基督教団出版局、1968年）29～33頁

石原謙（キリスト教史学者、元東北大学、京都大学教授、東京女子大学学長）

『日本キリスト教史論』（新教出版社、1967年）の中の「日本のキリスト教の特殊性」（204～207頁）

- ① 教派に対する消極的態度
- ② 法的性の弱さ
- ③ 「福音主義的ないし聖書主義的のいちじるしい事実」

その他土肥昭夫をはじめ、日本のキリスト教史家や神学者は、日本に伝えられたプロテスタンティズムは、「福音主義」と呼ぶべきものであることを主張している。

それではここで言われている「福音主義」とはどのような概念であろうか。今日私たちが考える「福音主義」とどのように関わるのか。

『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年）の中の
「福音主義」の項目（元同志社大学教授・土肥昭夫執筆）

「福音主義（Evangelicalism）：

プロテスタンント的伝統に立って、三位一体の神を信じ、神であり人間であるキリスト・イエスの贖罪を信じ、信仰的敬虔と聖潔な生活を重んずる主義。

18世紀イギリスのメソジスト運動、イギリス教会のローチャーチ派、18世紀からのアメリカの大覚醒運動にみられ、これが海外伝道を促す原因になった。来日した初期のプロテstant宣教師は多かれ少なかれ、この立場・信仰の持ち主であり、日本人信徒もこれを素直に受け入れた。、中略、。

福音同盟会の20世紀大挙伝道を契機として、1901—1902年植村正久と海老名彈正は、三位一体論、キリスト論について激しい論争を展開し、同盟会は「聖書を信仰と行為の規範とし、キリストを神と信じること」を規則として掲げ、これを福音主義の内容とした。海老名の共鳴者も少なくなかったものの、植村、小崎弘道、内村鑑三、高木壬太郎、高倉徳太郎ら大多数のキリスト教指導者は同盟会の立場に立った。

純福音主義といわれる人たちは、聖書無謬説に立ち特定の教理を主張するので、これらの福音主義とは区別される。」

同事典の「純福音主義」（米田勇執筆）

「純福音主義：いわゆる聖書十全靈感説を奉じ、処女降誕、奇跡、復活、昇天、再臨などを外形的に信じる場合が多い。しかし他面、聖書の歴史的記事をも心靈的、比喩的、教訓的にとり、やや我田引水的な解釈を施し、聖書に読み込む者がある。概して熱烈な伝道をし、大衆伝道に馳せるが、同時に個人伝道をも重んじ、その成果はみるべきものが多い。聖潔（きよめ）派の人々にこの語を使用する者が多い。」→参照「聖潔派」

1. 史料に見る日本のプロテstant教会の福音主義

19世紀の欧米のプロテstant教会の信仰復興運動の結果幕末の日本に福音が伝えられた。宣教師たちは禁教下の日本で熱心に福音の種まきを行い、その結果日本の各地に教会が設立された。

①日本最初のプロテスタント教会「日本基督公会（通称横浜公会、現在の日本キリスト教会・横浜海岸教会）」の成立とその信仰告白

1872（明治5）年、福音同盟会（The Evangelical Alliance）の提唱する初週祈祷会の結果、一種のリバイバルが起き、その結果として日本基督公会が11名の日本人信徒によって設立された。この教会の牧師として当時渡米留学中の新島襄を招聘しようとするが実らず、アメリカ・オランダ改革派教会のバラ宣教師を仮牧師とする。

「福音同盟会」：1846年ロンドンで結成された、正統信仰を掲げるプロテスタント教会の国際的な連合団体で、今日の世界福音同盟（WEA）の前身にあたる。九か条の信仰基準を掲げ、正統信仰の擁護、毎年の超教派の初週祈祷会や数年ごとの宣教会議の開催を通しての信仰の一致の推進、迫害下のキリスト者の救済活動を行う。

中村のトリニティ神学校の修士論文「The Impact of the Evangelical Alliance on the Development of the Early Protestantism in Japan」（「キリスト教史学第38集、『日本初期プロテスタンティズムに及ぼした福音同盟会の影響』1984年」

信仰基準（Doctorinal Basis）の第一条
「The Divine inspiration, authority, and sufficiency of the Holy Scriptures.」

この日本基督公会の1874年の「日本基督公会条例」の第一条例：信仰諸則九か条は福音同盟会の教理基準9か条から採られている。

第一条例 第一則

「聖書は神靈の示す所又權能とその信すべき事を充実せる事」

第二条例

「我輩の公会は宗派に属せず唯主耶蘇基督の名に依りて建てる所なれば、単に聖書を標準とし、是を信じ、是を勉る者は、皆是キリストの僕、我らの兄弟なれば、会中の各員全世界の信者を同視して一家の親愛を尽くすべし。是故にこの会を日本国基督公会と称す。」

「福音同盟会」は当初日本在住の宣教師を中心として活動し、ロンドンに

本部を置く「福音同盟会」に加入していた。1885年から日本人の基督教信徒大親睦会がこれに代わって「福音同盟会」となり、20世紀大挙伝道を推進した。

○1902年の福音同盟会第十一回大会の決議

福音同盟会の提唱した20世紀大挙伝道の結果、植村正久と海老名弾正の間にキリスト論をめぐって、「福音主義神学論争」が起きた。その結果として、福音同盟会第十一回大会は、次の決議が採択された。

「福音同盟会は、福音主義と認むるものは、聖書をもって信仰の完全なる規範とし、人々の救いのために世に降り給える吾等の主イエス・キリストを神と信ずるものとを言う」。

採決 原案 可 118名、 否 6名、 廃権 4、50名

②その後の日本の教会の連合機関の福音主義の表現

○日本基督教同盟（1912年発足）

「本同盟は普通に福音主義と称す諸教会相互の交誼を厚うし、共同の事業を經營し、、、後略」

この頃から日本の教会に、1910年のエジンバラ宣教会議に代表されるエキュメニカル路線の影響が濃くなってくる。エジンバラ会議では、東方教会やカトリック教会の将来的参加も期待し、一致の基礎を「聖書における一致」ではなく、「キリストにある一致」を強調した。この運動は、1948年の世界教会協議会の設立に結びつく。

○日本基督教連盟（1923年発足）

日本基督教同盟を引き継ぎ、日本の主要な9教派と8団体が参加し、相互の協力、対社会的意見発表、海外の同種団体との交流を行った。昭和期に入り、教会合同運動を推進した。これに純福音派の教派は、ほとんど加入していない。

その憲法の第二条 組織

「本会は福音主義と認められたる諸団体を以て組織す。」

○日本基督教団（1941年設立）

1939年成立した宗教団体法により、政府文部省の教会合同の国策により34の教派が設立した合同教団。

第四条 「本教団の沿革は左の如し」

「我が国における福音主義のキリスト教は安政6年渡來したる外国人宣教師の布教に其の端を発し、明治五年二月二日横浜に日本基督公会を設立せらる。是我国最初の福音主義教会にして何れの教会の派にも属せざるものなり。、、中略、、。この間しばしば各派の間に合同の議起こりしが遂に全福音主義教会合一の気運熟し、、中略、、、総会を経てここに本教団の成立を見るに至れり」

当初11の部制を採った。

第一部 日本基督教会	第二部 日本メソヂスト教会他
第三部 日本組合基督教会他	第四部 日本バプテスト教会
第五部 日本福音ルーテル教会	第六部 日本聖教会
第七部 日本伝道基督教団	第八部 日本聖化基督教団
第九部 きよめ教会他	第十部 日本独立基督教会同盟
第十一部 日本救世団	

このうちいわゆる純福音派と呼ばれる教派は第6部から第9部までであり、第十部は様々な立場の単立教会である。

初代統理は、最大教派である日本基督教会を代表する富田満（1883～1961年）であった。彼は南長老ミッショナリの宣教師から洗礼を受け、神戸神学校で学び、プリンストン神学校で学んだ福音主義的信仰の立場（「日本キリスト教歴史大事典」より）であったが、教団を代表して伊勢神宮を参拝し、教団が国策に従属した戦時下の歩みを主導した。

③日本のプロテスタントの代表的神学者の福音主義理解

○植村正久の神学的立場

植村正久は、最大の教派である日本基督教会の指導者であり、明治・大正期の日本の福音主義を代表する人物とされる。彼は福音主義神学論争において、自由主義神学の立場に立つ海老名弾正と真っ向から論争した。

彼は自分の福音主義の立場は、ピューリタン系のみならず、ドイツ敬虔主義、メソジスト派、英國教会の低教会派にも通じる包括的なものであることを述べている。（「福音主義の信仰」1915年）

彼の聖書観

「我等は極端なる『インスピレーション』説を執らず、又聖書は一字一句悉く神の言葉なりと信ずるものに非ず。」（1891年）

彼は自由主義神学の人々ほど極端ではなかったが、聖書批評学の成果を

聖書を理解する上で有益であると評価した。

明治学院で組織神学（当時系統神学）の教授をしていた時、W・N・クラークのテキストを用いた。これはアメリカにおける最初の自由主義の立場に立つ組織神学書であった。その神学的立場が自由主義的すぎるとして南長老ミッションのフルトン宣教師から厳しく批判された。（それをきっかけとして、植村は明治学院を辞任し、東京神学社を設立し、南長老ミッションは神戸神学校を設立した。）

佐藤敏夫は、植村の神学的立場を「進歩的福音主義」と呼んだ。

○その後継者高倉徳太郎

東京神学社校長、日本神学校校長
イギリス留学を通し、バルト以前のバルトと呼ばれたフォーサイスの神学的影響を強く受ける。

「オーソドクシーおよび福音主義の本質」（1924年）

「福音主義の何者たるかを考えるには、1846年に初めてロンドンで開かれた福音主義同盟で決議した福音主義の教理的基本観念を知るのが便宜である。」

「聖書を重んずる結果、聖書の歴史的研究をまったく無視して聖書の逐語靈感を固守するがごときは、我らの理性欲求を無視するものであって、健全なる傾向と認めることはできない。次に極端なる福音主義は信仰上の主觀主義に陥りやすく、客觀社會に対する態度が無頓着となりやすい。」

主著「福音的基督教」（1927年）

「言葉の宗教」、「恩寵宗教」、「良心宗教」としてのキリスト教を強調し、「カルビニスティック・エヴァンジェリカリズム」を自己の立場にしている。

その後日本基督教会、日本組合教会はじめ主流派教会においては、K・バルトの弁証法神学の影響が著しく、聖書観もその影響を受けていく。それは基本的に戦後も続いている。

○今日NCC系の人々が「福音主義」と言う時、このような流れがある。

佐藤敏夫『キリスト教神学概論』

「本書の神学的立場はまず福音主義である。それは日本プロテスタンティズムの神学的出発点が福音主義にあると判断するからであり、、、後略。」

「日本のプロテスタント諸派の人々は、大体において自分たちの信仰的、あるいは神学的立場を福音主義として自覚していたであろうということである。しかし、教義学という学間に深く入って行けば、世界福音同盟会の九か条の教理的基礎に立つというだけではもちろん満足することはできない。当然過去二千年間の教理史的遺産を摂取しつつ、その時代なりの教義学的努力を通じてキリスト教真理の深奥に迫らなければならない。その意味で我々は単純な福音主義に戻れなどと言っているのではない。日本のプロテスタンティズムは福音主義から出発したという否定しえない事実を言っているのであり、しかしそれだけに、そこを起点として幅を広げ、また深まっていかなければならないと言っているのである。」（310頁）

④純福音派の信仰の流れ

B・F・バックストンはCMSミッションの宣教師として1890年
来日

赤山での修養生の指導、日本伝道隊、神戸聖書学舎等の働きを通し、
日本に於ける純福音運動を推進。

彼の信仰的背景に19世紀の英國教会のローチャーチ（低教会派）の
信仰がある。これは、前述の福音同盟会と基本的に同じ特質である。

○ホーリネス教会

中田重治、カウマン宣教師によって1901年その伝道が開始された。
当初超教派的に伝道活動を展開するが、その働きは日本ホーリネス教会
となる。

「四重の福音」を教理として掲げる。

この教理は、アライアンス・ミッションを設立したA・B・シンプソンと
関わりを持つ。この団体は、中国・四国を中心に伝道する。

シンプソンも福音同盟会の影響を受けている。

○南長老ミッション

戦前の長老主義の教会の中で最も聖書主義を強く打ち出したのは、南
長老ミッションの宣教師であった。

S・P・フルトン

神戸神学校、中央神学校校長

彼は神学のすべての土台として、聖書の十全靈感と神の自己啓示の

完全性を明確に主張した。『エス・ビ・フルトンの生涯と神学思想』
(中央神学校史編集員会編、1976年)

戦後の日本基督改革派教会と神戸改革派神学校の設立に結びつく。

○ 「聖書信仰連盟」の設立

1933年1月30日に大阪の自由メソヂスト神学校を会場として、純福音派の代表25名が参加し、設立した。聖書信仰の普及のために一致協力することを目的として結成された。

規約の第二条 組織「聖書を悉く神の言なりと信ずる聖潔派の諸団体及び単立教会をもって組織す」

第三条 目的「一、聖書信仰の普及の為に協力一致する事
二、聖書信仰に影響するが如き宗教的、道徳的又は社会的諸問題に関し、教義の上一致の行動をとること。」

満場一致で、中田重治が理事長に選ばれた。中田の指名で、喜田川広（ナザレン）、土山鉄次（自由メソヂスト）、御牧碩太郎（日本伝道隊）、堀内文一（聖書教会、イエス・キリスト召団）、竹田俊造（復興教会）が委員に選ばれた。これ以外に協同教会、世界宣教団等が参加。

しかしこの直後にホーリネス教会の分裂問題が起き、実質的な活動はなされなかった。これらの教派は、1941年の日本基督教団の第六部から十部を構成する（ホーリネス系教派は弾圧された）。さらにこれらの教派のほとんどが、1951年に設立された日本福音連盟に結びつく。

結論

- ① 19世紀半ば以降日本に伝えられたプロテスタンティズムは、19世紀の欧米の信仰復興運動から受けついだ福音主義であり、直接的には福音同盟会に代表される福音主義または聖書主義の信仰であった。
- ② 20世紀以降、福音同盟会、基督教会同盟、日本基督教連盟に代表される日本のプロテstant教會の主流は、初期よりも幅広い福音主義に立っていき、30年代以降は弁証法神学が主流となっていました。
- ③ 一方で純福音派や南長老ミッショナリの群れは、聖書の十全靈感を信じる聖書主義信仰を保って伝道し、教会形成を行い、神学校を運営した。

- ④ 1941年の日本基督教団の設立において、福音主義を標榜して主流派も純福音派もすべての教派が合同するに至った。
- ⑤ 時勢とはいえ、信仰告白による一致ではなく、国策を受けて、主流派教会も純福音派教会も合同した。その最高指導者は、戦前の福音主義信仰を代表する人物であったが、伊勢神宮に参拝し、侵略戦争に協力する教会の先頭に立った。そこに日本の福音主義の脆さと未成熟さが露呈したと言えよう。
- ⑥ 戦後の福音主義は、聖書信仰を土台とする正しい信仰告白の堅持と同時に正しい歴史認識・社会認識のもとに伝道し、教会形成することが期待される。

参考文献

1. 佐藤敏夫『日本のキリスト教と神学』（日本基督教団出版局、1968年）
2. 佐藤敏夫『キリスト教神学概論』（新教出版社、1994年）
3. 大内三郎『近代日本の聖書思想』（日本基督教団出版局、1960年）
4. 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』（新教出版社、1980年）
4. 石原謙『日本キリスト教史論』（新教出版社、1967年）
5. 宇田進『総説・現代福音主義神学』（いのちのことば社、2002年）
6. 中央神学校史編集員会編『エス・ピ・フルトンの生涯と神学思想』（中央神学校同窓会、1976年）
7. 中村敏『日本における福音派の歴史』（いのちのことば社、2000年）
8. 中村敏『日本キリスト教宣教史』（いのちのことば社、2009年）
9. 中村敏『日本プロテスタント神学校史』（いのちのことば社、2013年）
10. 『日本基督教団史資料集第二篇』（日本基督教団出版局、1998年）
11. 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年）
12. 中村敏「日本初期プロテスタンティズムに及ぼした福音同盟会の影響」『キリスト教史学 第三十八集』（キリスト教史学会、1984年12月）